

## ペルーのフジモリ元大統領の死去（577号）

2024年 9月 石館

南米ペルーのフジモリ元大統領が9月11日86歳で死去した。小生はフジモリ元大統領に2回会っており、小生の2歳年上で、晩年は病気がちでいずれはこの日が来るとは思っていたが、この傑出した人物が亡くなったことに寂しさを感じる。今まで同氏については2回レジメで書いたことがあるが、改めて同氏について振り返ってみたい。



1990 - 2000年にわたり10年間大統領を務める。

ペルーに移住した熊本県出身の両親のもとに生まれた。日本国籍も有し、日本名は藤森謙也。国立モリ

ナ農科大で学び、母校の教授や学長を務めた。初挑戦した90年大統領選の決選投票で、後のノーベル賞作家バルガス・リョサ氏に勝利。人口の1%に満たない日系社会から、国家元首に上り詰めた。



同氏は10年間在任中、日本大使公邸人質事件を武力で解決したほか、インフレ収束や左翼ゲリラの掃討で成果をあげた。

公共工事による農村の貧困対策や経済の安定化に取り組んだが、その強引な政治手法は一方で“独裁”と批判を浴びた。96年12月、左翼ゲリラ“トウパク・アマル革命運動”の武装集団がリマの日本大使館公邸を襲撃し、当初

600人以上を人質に立てこもった事件では、日本政府の意向に反して軍特殊部隊による突入を決断、4か月に及ぶ膠着状態を打ち破り、残った人質71人を救出した。

2000年に3選を果たした直後、側近の不正が発覚。外遊先の日本から辞表を提出、実質的な亡命生活に入った。

日本財団は笹川一族の財団であるが、一頃曾野綾子氏が同財団の会長をやっていた。同財団はペルーとの間で長年にわたって事業をしてきており、フジモリ大統領とも深い関係にあった。小生もイスタンブール大学で講義をした際同財団に世話になった。

財団の現会長である笹川陽平氏の父である笹川良平とは、小生の大叔母が親しい関係にあったことは良く知られており、笹川一族とは不思議な関係にあること陽平会長に話したことがある。

曾野綾子は日本財団の会長を1995年から2005年までやっていた。会長時代に、ペルーでの小学校建設や不妊手術を伴う家族計画の保健所整備の援助を通じてフジモリ元大統領と交流を持つようになり、2000年に日本に亡命したときは宿を提供した。



フジモリ元大統領と曾野綾子

フジモリ氏は身の危険が迫っているので、大統領を辞めて日本に滞在したい、もうペルーには帰れませんので、力を貸してほしいと笹川氏に頼み込んだ。これに対し笹川氏は“曾野会長と共に全力で協力いたしますよう”と答えた。

その後2005年に突然出国するまで曾野綾子会長の家に滞在していた。滞在費用などどのようにしていたかは定かでないが多分日本財団で負担していたのではないか。

その後2005年に突然出国するまで曾野綾子会長の家に滞在していた。滞在費用などどのようにしていたかは定かでないが多分日本財団で負担していたのではないか。

1990年に大統領になってから、2000年まで大統領として、貧しい国民を熱狂させるポピュリスト、人権侵害との批判をいとわず改革を推し進めた独裁者。この2つの顔を持ち合わせ、約10年にわたり国を率いた。

少数のエリートの“寡頭政治”と評されたペルー政界に風穴を開け、経済成長の礎を築いた実績には異論はないであろう。

日系人は差別や弾圧と戦い、農業や小さな商店を営みひっそりと生きてきた。自身も排日暴動を経験し、タイや修理の父の仕事は行き詰まった。1990年、大統領に初当選した際には、目立つことを嫌う日系人から表立った支援は得られなかったという。



フジモリ氏と娘のケイコ

同氏の支持基盤は“持たざる人たち”だった山間の寒村にヘリコプターで降り立ち、首にタオルを巻き、日本からの物資を配った。政治的に無視されてきた先住民らに語りかけ、道路や橋などのインフラ、学校を次々と建設した。一方緊縮財政で物価の上昇を抑え外国企業を誘致した。しかし改革を急ぐあまり、軍部を使った強権的な政治手法に批判も強かった。

1996年12月の日本大使公邸の占拠事件が起き、71人が人質となった。特にトーマンはフジモリ氏の姻戚がリマ事務所の副所長として勤めており、人質は各企業の代表者1人となっていたが、トーマンだけは例外的に所長と副所長が人質となった。



リマの日本大使公邸占拠事件で、軍関係者に配置について指示するフジモリ大統領（当時）（1997年4月）

小生は大使館占拠事件の起きる1年前の1995年経団連のミッションでペルーを訪れフジモリ大統領と面談したことがある。また面談した日の夜パーティで親しく話をした。

そんな関係から公邸占拠事件でのトーマンの社員の救出の関係者の一人となった。当時の橋本首相はただ人質の命を危険にさらさない

で欲しいとただフジモリ大統領に頼むだけであった。フジモリ氏の指揮下軍は公邸に向け大音響の音楽を流し、その音に紛れて突撃用のトンネルを掘り続けた。最後は武力突入を執行しゲリラ14人を全員射殺した。人質71名はトーメンの現地社員は大けがをしたが皆命が助かったのは奇跡的だったと言える。



大使館公邸から救出される人質

この人質救出劇でフジモリ大統領の冷静、沈着、大胆な指揮は多くの国、人々から称賛された。日本の政治家ではこのようなことは出来なかったであろう。

フジモリ氏の絶頂期はこの時までで、2000年に側近による買収疑惑が浮上すると国を追われ日本に立ち寄り既述のように亡命生活に入った。

ペルー国会での公職追放が決議されても無罪を主張し、06年の大統領選に出馬を表明するなど権力への執着を見せたが、日本から祖国に戻る途中チリで拘束された。日本出国については滞在中大変世話になった笹川陽平、曾野綾子も知らなかったようで、後に笹川陽平はやはりフジモリ氏はラテンの人間だと述べていたとのことである。

06年に日本の女性実業家と結婚。07年には日本の参議院選にも出馬して落選した。同年9月にはペルーへ身柄を引き渡され、在任中に市民虐殺事件に関与した罪で禁固25年が確定した。



収監されたリマ市内の国家警察施設ではうつ病やガン、血圧以上に悩まされ、入退院を繰り返した。17年に当時のクチンスキー大統領が健康上の理由から恩赦を決定する。

しかし裁判所の判断で恩赦は無効とされ1年後に再び収監されたが憲法裁は23年12月に公表した判決で即時釈放を命じ、再び自由の身となった。フジモリ氏の晩年は

正に波乱万丈で、翌年の24年9月亡くなった。1995年ペルーでフジモリ大統領の絶頂期に経団連主催のパーティで親しく話をしたことが思い出される。小生より2歳年長で同世代を生きたものとして、また人間のスケールは小生と全く違うが、このような人生があったのかと思いを新たにする。

